

いま地域と学校が結びつく意味 ——農村と都市の動きから

岸 裕司・習志野市秋津コミュニティ会長

<http://www02.u-page.so-net.ne.jp/ca2/jun50fty/>



掘りたての井戸水をドラム缶に入れて、さっそく露天風呂を楽しむ秋津小学校の子どもたち。奥がビオトープの池と田んぼ。

学校は地域活性化の「ヘン」、子どもは地域の宝

新潟県のある過疎地の小学校が、五年前に廃校になりました。文部省が「廃校にして補助金を返還しないで済むように変えたこと」から、村は特別養護老人ホームに変えました。数名いた子どもたちも、遠くの学校に通うようになりました。村は、この先さびれる一方に感じます。

一方、鳥取県見町は、会見第二小学校の児童数が平成一四年度にはゼロになることを見越して積極策に打って出ました。廃校を防ぐために、なんと学校の隣接地に町営住宅を建設し児童のいる家庭に格安で貸すことにしました。昨年度六戸、今年度は四戸を建設中。三LDKで冷暖房と駐車場付きで、家賃は月二万円とのこと。

予算をかけないで、いま有る学校施設を有効活用

岩手県紫波町では、この十月から町立全十四の小中学校図書館と公民館図書室(通称「野村胡堂文庫」)をオンラインでつなぐとともに、全十万冊のデータを個人でもインターネットで検索できるようになります。さらに、三校の小中学校の図書館を町民に開放し、胡堂文庫とともに利用できる図書館が一挙に増大します。学校教育として使わない全土曜日と一部の日曜日の午後を「町民図書室」にと転用します。三校に出向けば、他の学校図書館の本も借りられます。本の貸出しのほかに、パソコンやインターネットが無料で利用できる、調べ学習が自由にできるようになります。また、二つの小学校図書館では日曜日にNPOの方々に「おはなし会」も開催します。さらに中学校では、中高年齢の方々を対象に「インターネット塾」も開催します。

都市部でも「学社融合」で、
ビオトープづくりや井戸掘り実現

私の居住する千葉県習志野市秋津は、東京のベッドタウンとして二〇年前に出来た新興団地です。埋立地のために自然は何もありませんでした。「無いなら創ろう!」との、学校と地域社会が融合した「学社融合」教育で、まちの中心にある市立秋津小学校の校庭にビオトープ(池や田んぼなどの自然観察園)を創りました。その延長で、今年の夏休みには井戸まで昔の手掘り技術で掘りました。井戸があれば「イザ!」の時、防災避難所の学校機能が充実しますし、池の水にも利用できれば一石二鳥です。

文部省が推進する地域住民に
「開かれた学校」

中央教育審議会の答申(一九九八年九月)には、以下の文言があります。

「……特に、住民の日常生活圏に最も身近に存在する学校は、学校教育の実施という本来の機能を前提として、地域住民の生涯学習やコミュニティ活動の拠点としても、その資源を有効に活用していくことが重要である。(第四章 三より)」

農村でも都市部でも、学校と地域が結びつくことでさまざまな積極策が出来るのです。「開かれた学校」と「創造的な地方の時代」は、どうやらセットでやって来そうです。

農文協

食と農で地域と学校を結び

月刊 現代農業

月刊 A5判 定価800円(〒120円)
年間購読料9600円(〒込)
●現代農業特別号(農業の技術・自給の知恵)
●現代農業9月号(学校給食に地元野菜を届ける)

21世紀の日本を考える 【食料・農業・農村】

年4回刊 A5判 定価400円(〒80円)
年間購読料1600円(〒込)
●10号 環境を保全する循環型町づくり
●8号 21世紀の人材を育む農業・農村

増刊 現代農業

経済合理性では解決できない環境・医療・福祉・教育の矛盾を農の原理=自給・相互扶助・互酬で切り開く! 食農教育、定年帰農、都市農村交流など新しい社会の芽を全国からレポート。

季刊 A5判・定価900円(〒120円) 年間購読料3600円(〒込)
●日本のグリーンツーリズムのすすめ
(2000年11月)
●楽しいね!! 食べもの教育応援団
(1997年8月)

農業教育

「生き物に学ぶ」「地域に学ぶ」さらに「教えることで学ぶ」ことで、教育を組み替え、課題解決学習や「総合的な学習」を先導した、農業高校の教育実践を軸に、これからの高校教育、地域の教育の姿と方向を大胆に提示。

年2回刊 A5判 定価400円(〒80円) 年間購読料800円(〒込)
●60号(2000年6月)
特集 新科目・新課程はこう教える
●59号(1999年12月)
特集・すべての高校で農業教育を
——高校改革への新たな挑戦